２０２６年度 早稲田大学大学院教育学研究科
博士後期課程　　専門職業人入学試験問題 ［ 小論文 ］
【教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）】

解答上の注意

１．教科教育学専攻（国語科教育学・国語科内容学）の入学試験問題は、出願時に届け出た指導教員の欄に従い、下記の表の回答すべき問題を回答しなさい。

志願票に記入した研究指導名	志願票に記入した指導教員名	解答すべき問題・ページ
国語科教育学研究指導	菊野　雅之	設問１（P. ２）
国語科内容学研究指導	福家　俊幸	設問２（P. ３～４）
国語科内容学研究指導	五味渕　典嗣	設問３（P. ５～６）

２．解答用紙の所定欄に、研究指導名・指導教員名・受験番号・氏名を必ず記入すること。

３．解答の際には、問題番号、設問番号を記入してから解答すること。（例「問題１　問１」）

４．解答用紙が複数枚配付された場合、ホッチキスははずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。

５．問題用紙は「６枚」（本ページ含む）、解答用紙は「１枚」です。必ず枚数を確認すること。

以　上

二〇二一大年度　早稲田大学大学院　教育学研究科
博士後期課程　入学試験問題

専門職業人入試　　科目名　小論文　（国語科教育学・国語科内容学）

設問１　次の文章は、『国語教育総合事典』の一節である。文章を読み、あとの問に答えなさい。

国語教育は，言語文化の伝達と創造に関わる営みであるから，言語の社会性やその言語集団が形成してきた価値観を，次代に伝えていくという側面がある．ここまでは「言語文化の伝達」という観点から，学習者とことばとをめぐる関係を考えてきた．

国語教育とは，そうした外側からの枠組みによって制度化されたことばのシャワーを浴びながら，一人ひとりの学習者が，自らの内側に自分自身のことばの世界を「創造」していく営みでもある．別の言い方をすると，国語教育とは，自らが生活の中で，感じたり考えたりしたことをことばによって確認していく中で，外側にあることばを，自らのものとして体感しながら編成し直していく作業なのである．そこでは，学習者である言語主体が，生活の中で獲得したことばを，自ら磨き上げ，自己表現や自己確立につなげていく活動が，きわめて重要になってくる．

こうした考え方に立つなら，学習者のことばと生活との関係をていねいにたどり，両者を密接に関連させて学習活動を組もうという方向が生まれる．いうまでもなくそれはこれまでの日本の国語教育の大きな潮流でもあった．つまり，国語教育を推進させる際に「言語生活」という概念を大事にしようという主張である．「言語生活」のみならず，「言語活動」「言語経験」などのタームは，日本の国語教育実践を支えるキーワードとしてきわめて重要なものだといっていい．

「言語生活」を国語教育の中心的な教育思想として確立することに大きな力があったのは，西尾実である．西尾の「言語生活」概念については，田近洵一が，『現代国語教育論集成・西尾実』（1993）の「解説」で言及している．また，桑原隆の『言語活動主義・言語生活主義の探究―西尾実国語教育論の展開と発展』（1998）は，詳細な資料をもとにした西尾国語教育論の成立をめぐる本格的な研究になっている．

また，国語教育論において「言語生活」の思想を具体的な実践の方向へと「単元学習」という形でさらに深めたのが倉澤栄吉であり，その仕事のほとんどは『倉澤栄吉国語教育全集』12巻（1987-89）に収められている．倉沢理論に導かれながら，よりよい「言語生活」者を育てる国語教育実践を展開した代表的な実践家に，『大村はま国語教室』15巻・別巻１／資料編（1982-85）を著した大村はまがいる．

もっとも，「言語生活」という概念を広義に考えるなら，「生活の中で獲得したことばを，自ら磨き上げ，自己表現や自己確立につなげていく」方向を目指した主張の出発点に，「自己を綴る」ことを主張して，日本の国語教育を大きく前進させた芦田恵之助を置くこともできるだろう．また「生活綴方」運動は，書く活動と社会生活とを密接に関連させることで，人間認識，社会認識を拡大進化させる教育実践を展開してきた．あるいは，戦後文学教育運動も，文学作品を読むことを通して，読み手の認識を変革させる体験を組織しようとしてきた．これらも，一人ひとりの学習者の内側に豊かで確かな主体的なことばの世界を創造させようとする教育運動だと考えることができる．つまり，国語教育の本質は，学習者がことばを通して新しい世界とかかわることによって，自身の「言語主体」を確立していくところにあるのである．

田近洵一は，『言語行動主体の形成』（1975）の中で「己れの置かれた歴史的状況をふまえて，他者である確かな存在とかかわることの中で，たえず生成・変革・確立していくところに主体の本質がある」という．とすれば，「言語主体」の確立は，状況と向き合いながら，他者と交流を繰り返す，ダイナミックな過程の中でなされるものであり，そうした「言語経験」こそが，国語教育の言語活動の中で組織されなくてはならないのである．なぜなら，国語教育の本質は，多様な他者と交流することによって，言語そのもののもっている文化性や国民意識を相対化し，創造的に言語主体の確立を図るところにあるからである．　〔府川源一郎〕

問１　この文章のタイトルを１０字以内でつけ、併せてその理由についても述べなさい。

問２　「言語生活」あるいは「単元学習」について知るところを述べなさい。

問３　この文章の内容もふまえた上で、あなたの考えを述べなさい。

二〇二六年度　早稲田大学大学院　教育学研究科
博士後期課程　入学試験問題
専門職業人入試　科目名　小論文　（国語科教育学・国語科内容学）

設問2

一、次の文章は小助川元太「教材としての「古文」と作品としての「古典文学」」の一節である。文章を読み、以下の問いに答えなさい。

いくら教科書会社が新しいチャレンジをしても、採択されなければ会社の経営は成り立たない。吉井氏が指摘されるように、国語総合の場合は、現代文教材の内容で選ばれることが多いため、古文教材はあまり顧みられることがない　のも事実だろうが、それでも、古文教材に対する定番指向は現場に強く見られる。たとえば、三省堂が『明解国語総合』の採択校に対して行ったアンケート、結果で支持率が八割以上と高かったのは、「ちごのそら寝」（『宇治拾遺物語』）「筒井筒」（『伊勢物語』）「公世の二位のせうとに」「亀山殿の御池に」「高名の木登り」（『徒然草』）などといった、いわゆる定番教材と呼ばれるものであり、「五月ばかりなどに」「にくきもの」を取り上げた『枕草子』はやや支持率が落ちた。教師からのコメントには、「『枕草子』は定番の段がよい」というコメントが見られ、『徒然草』に対しても、「「亀山殿の御池」よりは「仁和寺にある法師」の方が面白みを伝えやすい」とのコメントがあった。

ところで、アンケートを見ると、教科書教材の定番化に大きな影響を及ぼしている「現場の教員からの要望」には、出会いが少ないからこそ、生徒には最低限の作品は読ませておきたいという教員側の切実な思いも窺えるのだが、それ以外にも、看過できない問題が横たわっていることが窺える。それは、高校教員の中学校教材への無関心や口語訳へのこだわりである。

また、『明解国語総合』は、全体的に平易な内容であり、いわゆる進学校をターゲットにしたものではない。そのため、最初の教材（「ちごのそら寝」）では本文の下に全訳を掲載している。ところが、アンケートでは、「訳が全て載っていて、どう取り扱うか迷った」「授業で訳をさせたいので、教科書に訳はのせなくてもよい」といった回答が見られた。編集サイドでは、教科書が対象としている学習者のレベルを考慮し、まずは古文に親しませる授業を現場に期待しての全訳だったのだが、そうした意図とは裏腹に、現場では相も変わらず生徒に口語訳をさせる授業にこだわっているという構図が見える。もちろん、到達目標の一つとして、「生徒が辞書を用いながら口語訳をすることができるようにする」という設定をすることに問題はない。だが、実際にはそれ以外の目標設定ができない、換言すれば、「古文の授業では口語訳さえしておけばよい」という程度の意識しか持っていない教員も多いのではないかということである。

小学校で「古文」に触れる機会が出てきたということは、「日本人としてこれだけは読ませたい」と教員の多くが思う「古文」が、早い段階で子どもたちに提供されるということである。つまり、高校では定番にそれほどこだわらずに、もう少し自由に教材選択ができるようになるはずである。教科書教材の定番化に大きな影響を与えているのが、現場教員からの声であるならば、より魅力的な教材の掲載される教科書作りのためにも、まずは現場教員の意識を変えていく必要があるのではないか。

問　この文章を読んで、あなたが考えたことを論述してください。ご自身の関心に引き付けて論述していただいて結構です。

二〇二六年度　早稲田大学大学院　教育学研究科
博士後期課程　入学試験問題
専門職業人入試　科目名　小論文　（国語科教育学・国語科内容学）

二、次の影印を読んで、以下の問いに答えなさい。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

問一　この影印全体を翻字してください。
問二　傍線部1はどういうことか、その意味を説明してください。
問三　傍線部2はどういうことか、その美意識の変遷に言及しつつ説明してください。
問四　傍線部3が中心に記されている平安時代成立の文学作品を二つ挙げて、どのように描かれているか、それぞれ簡潔に説明してください。

二〇二六年度　早稲田大学大学院　教育学研究科
博士後期課程　入学試験問題
専門職業人入試　科目名　小論文　（国語科教育学・国語科内容学）

設問3

一　小論文

次に示す文章は、饗庭孝男『批評と表現――近代日本文学の「私」――』の一節である。文章を読み、後の問いに答えなさい。

慶応三年に生れた漱石は、明治という開化の時代にあっても、彼を育ててきた江戸下町のなかに培われてきた共同体の持つ感性と自己との連続性までも失ったわけではなかった。この感性は、ただ彼固有の生に還元できる性質のものではない。それは急激な外からの変化が強ければ強いほどみずからその連続性を確認する。

漱石自身がたとえ「今では凡てのものが夢のやうに悉く消え失せてゐた。残つてゐるのはただ大地ばかりであつた」と嘆こうとも、彼の裡に、彼を超えて内的に働きかけてくる感性の連続性まで喪われたというわけではない。彼の幼時のなかで、江戸下町という場所と過去の時間に緊密にむすびついた生活感覚は、「昔の通り」の物寂しい講釈師の声とともによみがえって現在化されながら過去を今に取りこんでしまうのである。なるほど目に見える街並や木立は現象的にこわされ、ほろび去り、視界から消えうせてしまうだろう。しかし、目に見えない形で感性は「ただ大地ばかり」の上に幻の昔の世界を、物にふれ、聞くたびに現出させるのである。たとえば漱石という人間をつうじて。

こうした感性の連続性は、明治によってはじまった「近代」という概念と、その結果もたらされた「個性」という概念とは無縁に存在している。この感性はそれ自体、下町の文化の体系の働き方をもっている。漱石に、自ら切断しようとしながら切断できず、かえって彼を追掛けてくる過去があるとすれば、その過去は同時にこうした彼を支える感性の連続性の世界の否応なしの確認でなければならなかった。漱石が最晩年に及んで、彼の自伝的な作品である『道草』を書いた大きな理由の一つは、彼の過去がどれだけ苦さをもっていようとも、その愛憎の両極的な感情が息づいていた世界の確認であったと言えるだろう。それは物寂しい講釈師の声がきこえてくる世界であり、同時にまるで彼の心中を思わせるような誰も住んでいない「大きな四角な家」が建っている世界でもあり、孤独でありながら自由であった幼時の世界でもある。この二つの世界は切っても切れぬ関係にある。

漱石が『道草』や『硝子戸の中』を書いたのは、この意味で考えてみればまことに興味ぶかい。彼の、主体的に意識的に書くという行為の能動性の下に、隠された共同体の感性が無意識的な形で働きかけ、彼を過去に戻すのである。彼はいわば、書くと同時にその感性によって書かされるのである。およそ、どのような人間にせよ、自分が生れ育った場所や地域の感性と言語の目に見えぬ体系によって生の輪郭を与えられている。その「個」としての表現もまた、こうした場所の体系からのがれることはできない。存在の下部にその刻印をうけながら作家は「個」としての顔を表現の世界に浮上させているのではなかろうか。作家の「私」が書く作品は、このようにして「私」と「私を超えるもの」の二重の働きから生れるということもできる。あらゆる表現行為と作品を、その表現者の「個性」にのみ還元する考えはあまりにロマン主義的な想像ではなかろうか。

問　傍線部「主体的に意識的に書くという行為の能動性の下に、隠された共同体の感性が無意識的な形で働きかけ、彼を過去に戻す」とあるが、日本近現代文学の作品の中で「隠された共同体の感性が無意識的な形で働きかけ」た例と考えられる作品を挙げ、なぜそう言えるのか、具体的な根拠を挙げながら説明しなさい（複数の作家や作品に言及してもよい）。

二〇二六年度　早稲田大学大学院　教育学研究科
博士後期課程　入学試験問題

専門職業人入試　　科目名　小論文　（国語科教育学・国語科内容学）

二

次の文章は、一九一四（大正三）年に刊行された小説の冒頭部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

青田三太郎は机の上に頰杖をついて二時間ばかり外を眺めてゐた。さうして思ひ出したやうに机の抽斗の奥を探つて三年ぶりにその日記を取り出した。三太郎の心持が水の上に滴した石油のやうに散つてしまつて、俺はかう考へてゐる、俺はかう感じてゐると云ふ言葉さへ、素朴なる確信の響を傳へ得ぬやうになつてからもう三年になる。彼はその間、書くとは内にあるものを外に出すことにあらずして、むしろペンと紙との相談づくで空しき姿を隨處に製造することだと考へて來た。日記の上をサラ〳〵と走るペンのあとから、「嘘吐け、嘘吐け」と云ふ囁が雀を追ふ鷹のやうに羽音をさせて追ひ掛けて來るのを覺えた。三太郎はその聲の道理千萬なのがたまらなかつた。わからぬのを本體とする現在の心持を、纏つた姿あるがごとくに日記帳の上に揑造して、暗中に摸索する自己を訛傳する、後日の證據を殘すやうなことは、ふっつり思ひ切らうと決心した。さうして三年の間雲のごとく變幻浮動する心の姿を眺め暮した。しかし三年の後にも三太郎の心は寂しく空しかつた。この空しく寂しい心は彼を驅つて又古い日記帳を取り出させた。とりとめのないこのころの心持をせめては罫の細かな洋紙の上に寫し出して、半ばは製造し半ばは解剖して見たならば、少しは世界がはつきりして來はしまいかと、はかない望が不圖胸の上に影を差したのである。日記帳の傍には三年前のインキのあとを秩序もなく殘した白い吸取紙が、春の日の薄明りにやゝ卵色を帶びて見えてゐる。三太郎は碁盤に割つた細かな罫の上に、細く小さくペンを走らせて行く。

「生活は生活をかみ、生命は生命を蝕ふ。俺の生活は湯の煮えたぎる鐵瓶の蓋の上に、あるかなきかに積る塵埃である。その底に生命が充溢し、狂熱が沸騰してゐるといふ意味ではない。俺の心はたゞ常に動搖してゐる。動搖を豫期する念々の不安は現在の靜安をも徒に脅迫してゐる。一皮をむいた下には赤く爛れたさま〴〵の心が、終夜の宴の終局を告ぐる疲れたる亂舞に狂ひ回つてゐる。重ねて云へば、俺の生活は芝居の波である。波の底には離れ〴〵になつた心が、下廻りらしい乏しさをもつて、目的もなくたゞもがいてゐる。この動亂こそわが生存の唯一の徵候である。そこには純一なる生命もなく、一貫せる主義もなく、したがつて又眞の生活もない。俺の生活は既に失はれた。俺は今眼を失へるフォルキュスの娘たちのやうに、黄昏れる荒野の中に自らの眼球を捜し廻つてゐる。

俺は古の心美しき人たちの歌に聲を合せる――俺にも昔は眞正の生活があつた。幼き日は全心にしみ渡る恐怖と悲哀と寂寞と、歡喜と爭心と親愛との間に過ぎた。俺は子供として又人として、無花果の嫩葉が延びるやうに純一無雜に生きて來た。俺の心は一方にすく〳〵と延びて行く命であつた、一方には又靜かにさわやかなる鏡であつた。命が傷ついて鏡が曇つて、こゝに動亂を本體とする現在が來る。明日になつては命が枯れるか鏡が碎けるか、現在の俺には何事もわからない。ただ俺には滿足し得ざる現在がある、現在に滿足せざる焦躁がある。

①この小説について、刊行当時の文学や出版状況との関わりの中で説明しなさい。
②この小説の表現の特徴と手法について、具体的に本文をもとに論じなさい。

早稲田大学大学院教育学研究科

博士後期課程 入学試験解答用紙 専門職業人入試

科目名 小論文（国語科教育学・国語科内容学）

研究指導 教員名（　　）	
受験番号	
氏　名	

大学記入欄

問題番号

←

裏面に続く ←

裏面を使用する場合ここから記入すること